

## 新たな時代を迎えた医師の生涯教育

渡邊 善則

東邦大学医学部外科学講座心臓血管外科学分野（大森）教授

医師の生涯教育は、社会的背景から多くの影響を受けます。日本の人口減少、超高齢化社会の到来への対応は喫緊の課題であり、医療のグローバル化も含め、今後医療の分野において避けて通れない課題です。

2015年を迎えた今年、いわゆる「団塊の世代」[昭和22(1947)～24(1949)年に生まれた人]が3395万人となり、2025年には「団塊の世代」が75歳以上となり、高齢者人口が3657万人に達すると見込まれています。総人口が減少する中で高齢者人口が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2035年には国民3人に1人が65歳以上となり、2060年には、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されています。(内閣府 [http://www.8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf\\_index.html](http://www.8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html))

近年人口減少に歯止めをかけるため、小児医療、産婦人科医療を含めた女性支援に重点が置かれ、急性期医療の効率化も推し進められています。また、過度に専門分化した医療対策として、総合診療医の育成普及にも力が注がれています。2010年に厚生労働省は次代を見据え、より質の高い医師を効果的に養成すると同時に、地域の医師不足問題に対応するため臨床研修制度の見直しを行い、2016年度から始まる新専門医制度では、専門医療施設の集約化、専門医の数と分布の適正化を計り、効率的な医療体系へと再構築を計っています。現在運用されている臨床医研修制度では、研修医の選択自由度が高まり、専門医制度が浸透したために学位より専門医を目指す医師が増加し、大学以外の臨床教育病院で初期研修を受ける潮流が加速しました。このため大学の存在意義を問われる事態となりましたが、後期研修として大学を選択する研修医のUターン傾向が見られるようになりました。この原因として、従来臨

床技術より研究に重点が置かれていた大学での卒後臨床教育に、専門医資格を取得するため早期に臨床経験を積ませるプログラムが導入され、若手医師のニーズに答えたことも一因と言えます。

大学において新たな時代を迎えた医師の生涯教育においても、教育、研究、臨床各分野のエキスパートの育成が求められていることは変わりありません。急速に進歩している医学の現状を考えると、教育、研究、臨床全てに卓越することは困難と言えます。今日の若手医師の育成は、何事にも不可のない医師の育成ではなく、個々の特性を伸ばすプラス思考が大切と言えます。教育、研究、臨床の評価法は一律ではなく、比較が難しいと言えます。しかしながら全てに共通することは、成し遂げた成果を科学的に証明し、広く知らしめるために記録として残すことであり、論文化することが最も有効な手段です。若手医師の登竜門として症例報告がありますが、臨床の場において担当した1例1例を大切に診療し、診断、治療について成書で学び、更に論文検索することで新たな発見が出来れば、生涯忘れ得ない貴重な経験を積むこととなります。この基本的なアプローチ法は医学研究の基礎を成すもので、症例報告の重要性はいつの時代においても不変と言えます。そのためにも、東邦大学医学会雑誌の役割の1つとして、若手医師の研鑽の場であることも求められます。安易な投稿や掲載を戒め、英文化を進め、東邦大学発の情報をワールドワイドに発信することが、academic doctorの育成に留まらず、大学全体の更なる質の向上につながると考えます。

東邦大学医学会雑誌は、東邦大学の将来を担う重要な役割を担っています。学内に留まらず、学外からの優れた原著論文が掲載される学会誌になることが望まれます。